



繪本
豐臣勲功記

五編
十

遠江
2209
50



門入遠 13
冊 2209
卷 八〇

繪本豊臣勲功記五編卷之拾

目錄

右門小早川文高こゝろのちひなをやがのくわいぐんとをいせう議軍事ぎぎ

屬元長もとなが弑殺ころ

秀右ひでゆき使安國寺やすくにや惠瓊めぐみ翻和かへり

屬傳八でんぱち被捕とら

繪本豊臣勲功記五編卷之拾

清水長左衛門源遂自殺

属 西軍和賂

秀吉大慮真令毛利家服

属 单駈帰軍



繪本豊臣勲功記五編卷之拾

江戸 八功舎 徳水刪補

吉川小早川交高議軍事属 元長試叛

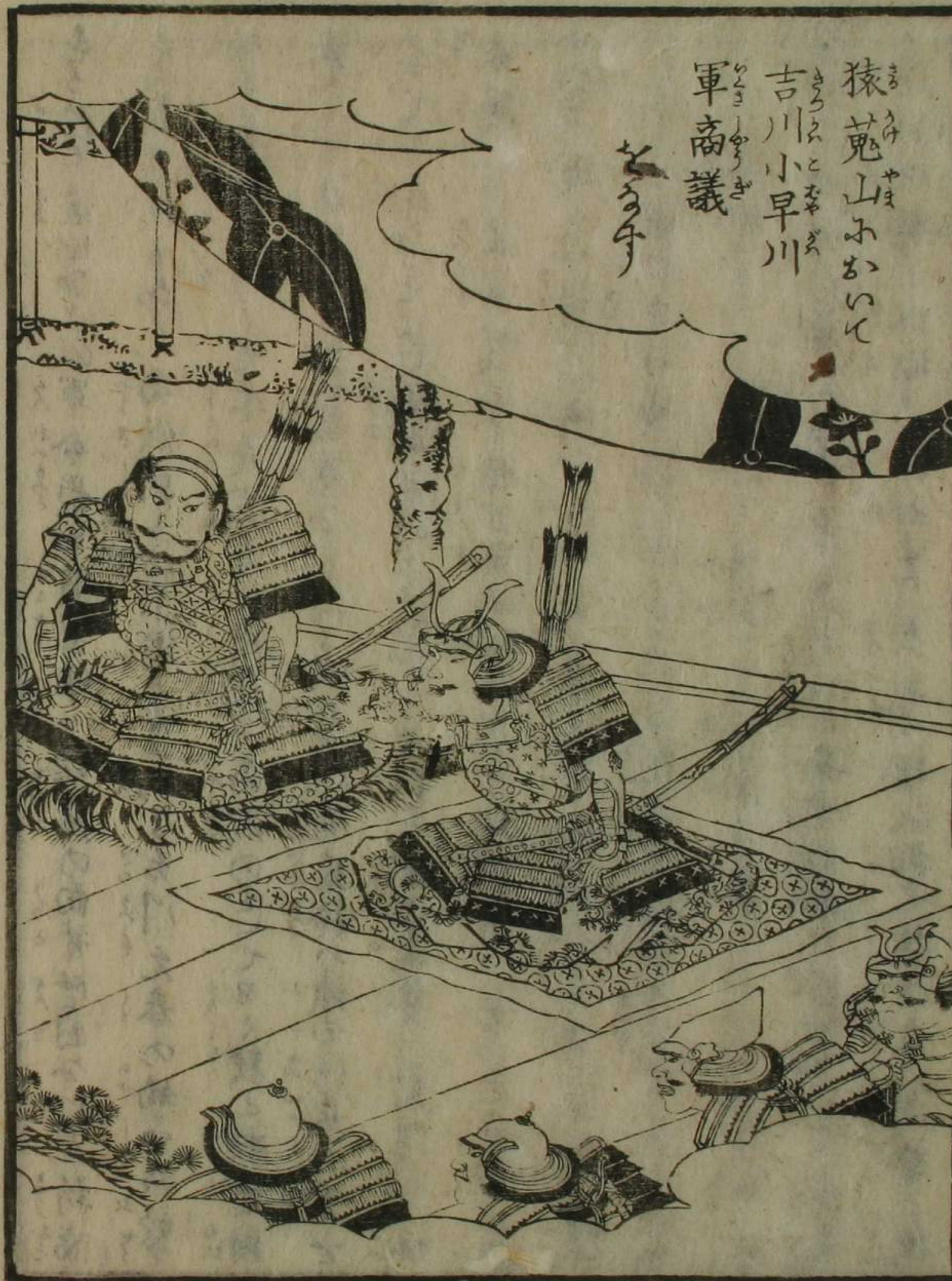
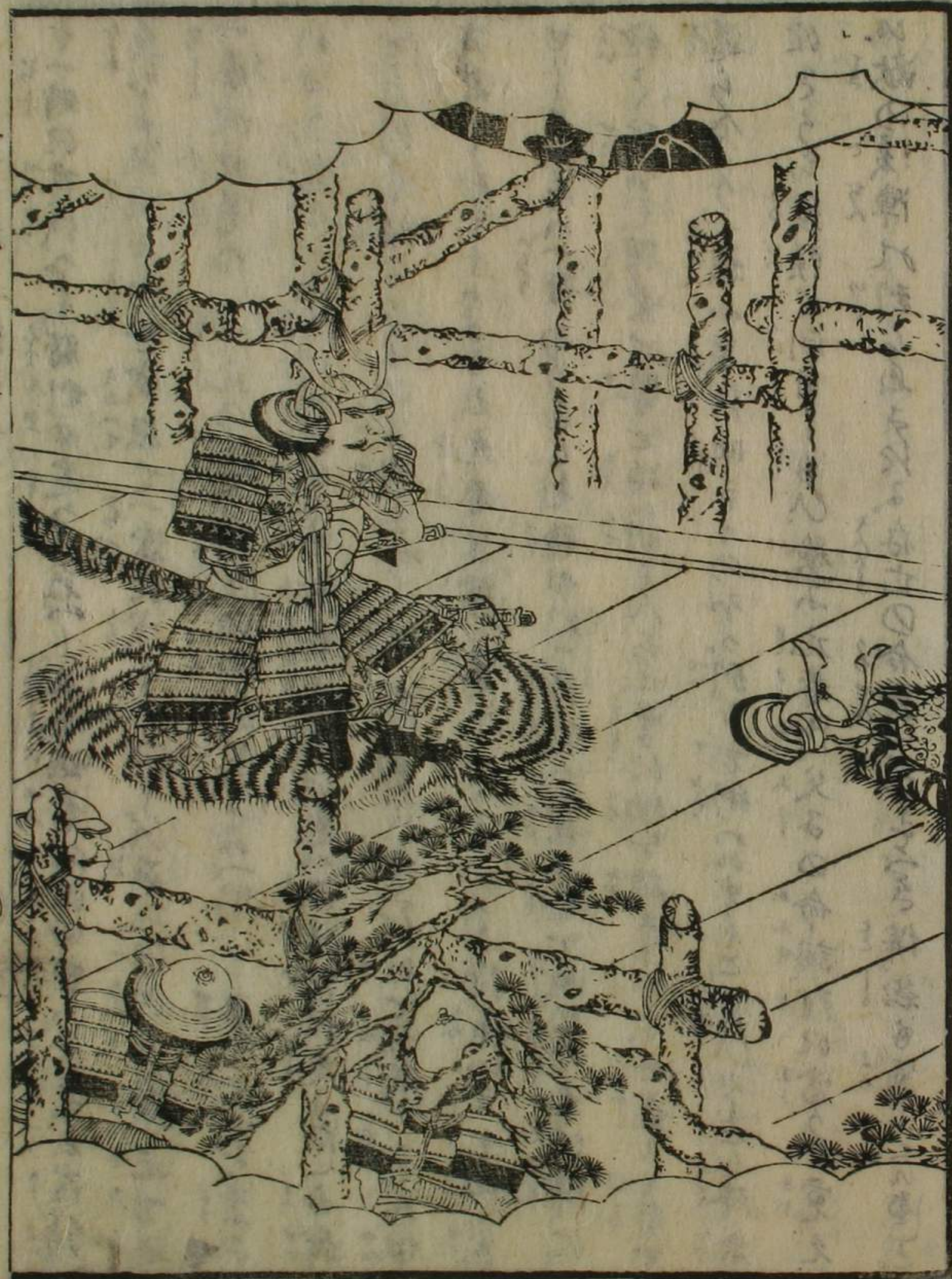
一尺の布ハ尚健ニ巻ク一斗の粟ハ尚巻ク一斗ハ兄弟あまハ豊臣氏ニ衰一張氏ハ興るの叔姪嘗々あるなり小賢あるるを我あるるを吉川小早川が主と主と一て心成一ふ一國家を以て門々泰山の像くは縁するとも猶餘をあり然バ遠眺中園ハ羽柴流永守秀吉毛利三家ニ對陣一て過つる五月の始頭より依中為松の城を圍ミ溜ミ然と攻着る開も遠高松の城とつハ高くも何々ぬ平山が上ハ築設け一城にして四面に池塘を湛たり誠秀吉源く之地の理を鑑遠那邊に名流將ハ長良川吸毒川大堰川の流を鑑歸此郷中へ搦投たを五月の下幹に



豊臣記五編卷之十

王のハ水涼涼く水溢る山城渡一丘を趁大波小湊さうちのけく。後小
 一の大湖水を成し。いま二三尺水増をも。高松の城ハ忽地ハ水底に沈りぬ
 一と城中の男女老ると初ハとや怯て。そハ悲嘆を借り合て。死
 と旦夕に侍のまかり。秀吉既ハ城中の難危ある態ハ沈視し。門ハ大船救
 艘に擡と捨揚。城を眼下ニ視知させ。大砲小砲の筒口と數百連發く。怪し
 く。放蕘蕘蕘。改着るものと大急なり。然ども城兵猛勇なれを。怖る氣
 危少些もな。吾我門と固くちり。更ハ疾まを防禦に然りと。いども
 淹陣水ハ時々刺くに水涼涼て。已病半向と鐘るものあり。我を以て城
 兵ハ食骨を水裏の埃とまぐ。と各潛ハ歎息と。さきに固て援軍の
 大將若川元春。小早川隆景。備兵ヲ指揮し。いかにして虚を脱出し。
 先を截て偏さるると種々更せり。まぐれども。羽柴の勢ハ大軍ハ一瞬

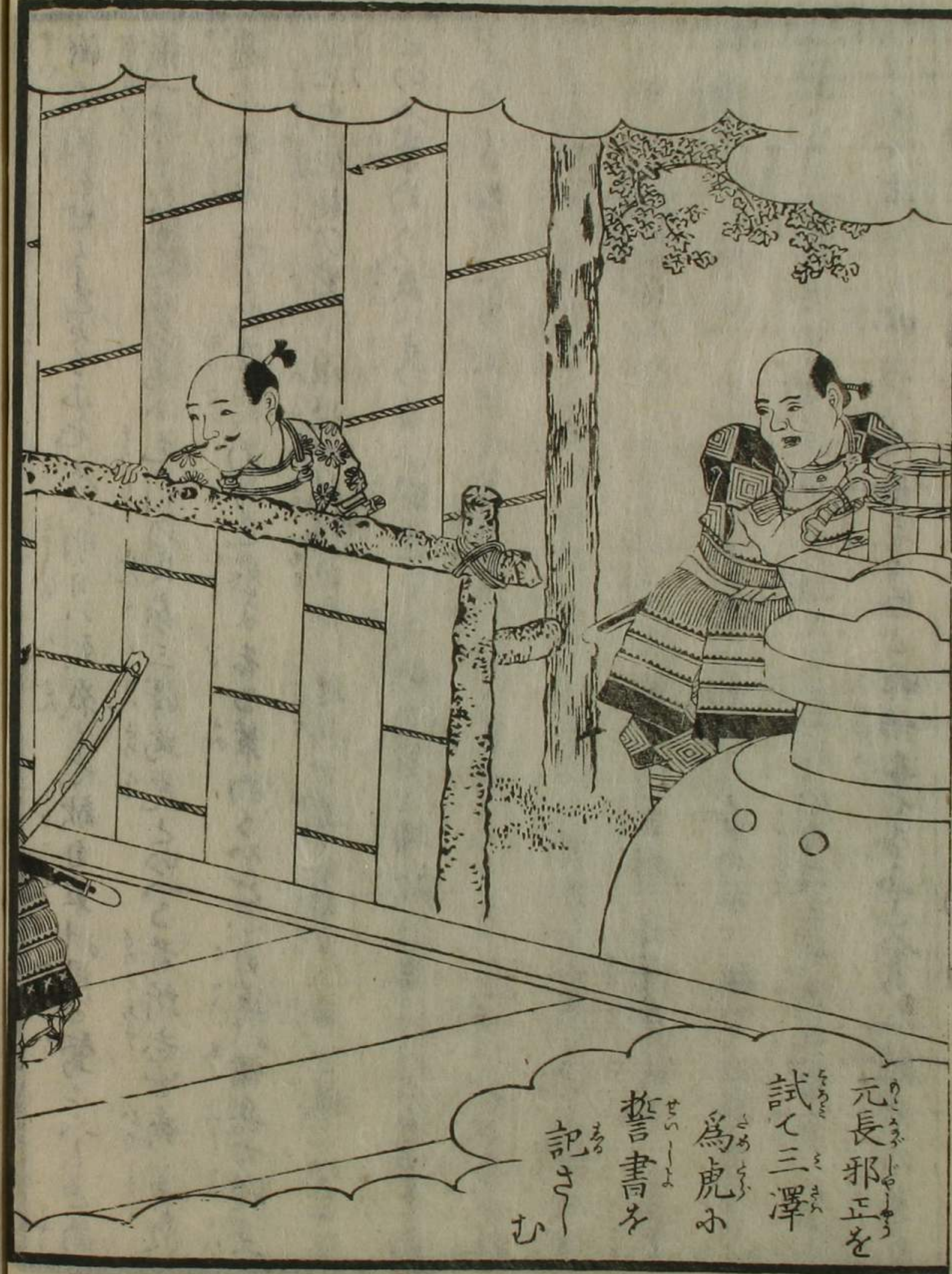
する際も虚をさし。軍令最も嚴密にして。隊伍の面背堅固なれ。斬断
 まぐ。方使もあ。高松屋ハ吃小過たり。駒は若川元春の嫡子。流刃少
 補元長。腰甲鳴して。茶座宣く。新徒ハ高松の匠して。日々秋と斬着討
 彌々。中在たり。人ハ援軍ハしたる。切の近。東。時ハ織田長。大軍を
 率て下向をまよし。風聞ハ門をらかり。これを。秋の威勢ハ愈増り。信
 長遠地に來着せ。二十餘万騎の敵あるもの。城をこれに易。自方ハ兵
 士ハ日々夜々に恐怖を懐た。居して。所をそのなれ。若松城。とる。は。遠ハ
 ハ毛利家總領軍に。登ふ。此を。之。ハ。信長。出張せ。う。ち。忍
 一。一。我。は。ま。つ。る。う。隆。景。ハ。軍。勢。を。多。く。か。つ。つ。中。に
 波。伍。ハ。秀。吉。の。旗。本。ハ。斬。く。投。入。乃。子。ハ。亦。雲。伯。石。の。勢。を。合。せ。く。秀。長
 ハ。陣。城。頑。頑。ハ。攻。逼。ハ。後。詰。より。秀。吉。が。勢。に。搦。て。投。隆。景。ハ。河。勢。と。捷



豊田記五段巻三十一

一時に改代を勝利必定なりぬ。且亦後帝の浮田勢ハ素来反叛弱
 兵を遣はし強き方を試照て一連に伐く出べからば家臣の浮沈身
 の安危唯這
 一舉に決着ぬ。十死のうち一生の合戦せよ。一かゝる席を打てを棄さ
 れざる。然るも小早川隆景ハ才智最厚深けき。只條計謀先よ。合戦
 を争ひて後よするの名将をかく奪ふに奮戦す。目と腕腕を以て思惟
 城巖一かたよりなる由。元春焦燥て席を遣す。いふ小隆景ハ元長言
 せしとあらハ一理ありとこそ聆ゆれ。息流元長小懸を敗せ乃夫後陣に
 砲を攻るも羽柴此勢を破崩らん。と堂に物を推るが如し。益々日貞と
 送らんより一戦小事決まるのや。別子方勢ハ必ずと宣ひ。是を隆景
 以て之を懸懸て同日一多。後小元春河父子の命詞理に當りて覺え
 此敵の後陣に到らぬ。存亡の合戦を多とす。偉然も宣く。いふ酒と。

漸く同をせらるるを。然バ明日ハ列戦して敵自軍此目と驚き。一と高
 城一決したり。と。敵小元利の長家三澤為虎といふ者所志を疾。右に
 通し及軍するの謀計ありと。密に告る輩あるや。小自軍此備兵士通互
 に心忽地疑ひ生じ。誰染の敵に自を。進兵を導きて自方の陣を敗しむるを
 どのふ業あり。或ハ秀吉小頼き。而將の首を頑強に降らん。と。是を
 里かど。さぬぐに言喋さる。是金羽は密計より。出する詞を知り。これ
 各公を固合て。明日の軍を愉快進まん。と。其の氣急をけき。此小軍も
 一かゝる。亦延演をかりたる。風説矣論。これ言訊して。信長近日二十餘万
 の大軍ふ。推進する。なる。小自軍ハ元利三森のや。援軍の勢も。かり
 たり。これを遂にの事。多し。多く。決ても對陣の力及を。元春隆景を遠
 うらぬ。陣を拂て。帰國する。と。私語合て。あし。やらん。諸軍の是も



元長邪正を
 試く三澤
 爲虎小
 誓書を
 記さむ

ありはるべ。始終の合戦かやつらなくと看よなる是ふよりて元春父子隆
 景各腹長一個を俱したるのそあく。大將輝元の本陣をる。相山も参よみ
 一高嶺せらるる中より近來三澤其餘の敵軍敵ふ勅するに所ゆる
 一有るの一戦か。がさうらん。東西の益に達する軍兵同陣同隊に
 あり。敵自方の妨を此山陣の柵を堅固し。自勢をより。兵糧分て隊
 保を丈夫不敵を引請。決戦するをよ。か。らん。三澤をよ。其餘の
 兵軍。敵に心通る詞の。真実なるを秀吉か。ら。自方の陣一斬
 投べ。其時こそ三方より。秀吉の旗本。舊地。斬投快死するの外ふ
 計議。と。評議。斬まをふ。一決か。各本陣。隔ら。さ。か。ふ。吉川
 元長の。気の大將。を。れ。從者。も。率。直。小。三澤。為。虎
 少陣。所。子。到。り。突。も。せ。突。と。通。里。為。虎。膝。根。に。を。圖。と。座。い。ふ。為。虎

敵秀吉に。前。控。して。自。方。の。陣。を。詭。く。し。成。兼。所。の。實。を。告。せ。れ。ん
 ため。得。く。あ。ま。ま。ぐ。入。來。か。ん。汝。實。に。然。こ。何。ん。万。謹。唱。首。を。擡。斬。く。流。前
 守。に。愧。る。と。い。わ。ふ。と。鞠。問。を。為。虎。ま。し。り。活。る。政。企。か。ま。俾。な。れ。ば。果。ま
 で。ふ。う。ち。殺。さ。身。を。地。に。投。て。謝。し。て。磨。ら。く。斯。の。懐。ひ。も。憑。ら。ぬ。命。せ
 成。兼。所。の。事。を。小。臣。を。智。子。の。い。ご。も。敵。代。先。を。祖。より。元。利。家。の
 臣。と。し。て。君。恩。の。山。海。も。あ。ど。及。ぶ。處。き。其。恩。深。を。慕。る。身。に。し。て。い。さ。せ。う。奈
 に。逆。心。を。挿。起。せ。ま。う。と。さ。也。是。の。讒。者。の。計。言。を。り。め。我。を。失。え。ん。た。め
 なる。處。一。斯。所。疑。心。に。開。る。う。の。起。證。文。牒。書。記。て。呈。す。願。く。は。それ。あ。く。を
 猶。疑。え。せ。り。う。の。我。身。に。薄。命。を。さ。す。に。方。僅。所。亦。よ。と。胆。打。刺。赤。心。成。願
 それ。か。う。何。ん。か。く。び。と。重。き。成。驗。く。吉。川。元。長。實。に。叛。心。を。た。の。あ。ら。む
 誓。書。を。記。得。し。と。く。願。く。懸。野。の。平。且。紙。を。翻。覆。し。て。當。出。せ。を。為。虎。抜。く

事臣曰五編卷之三

其来に天地の神祇を驚かし、てまのるまのるに誓書を祀得、豊信は
 撃出たり元長得と其體を祀るに邪を些かも入えざりたれば、疑ふにわ
 らびと、其来誓書を襟底に、陣所ふこをい帰らまて、備亦輝元が信り
 居る、廂山の本陣ふ其翌朝六月朔日の卯刻より、率忽ち諸卒を強催
 一廂山の四方八隅、柵を繕せ、堤を築せ、此が北面三檀、弓を洗を掃へ、
 せ隊伍堅固に成就志々、今自方軍中に、激しく叛心の粟、のまはと
 て、妨らるるまのる、將公成寧やしめ、諸卒も難那を志門めけき、陣
 中、漸く平和にありぬ、然るに、已前、及け、計微の如く、羽柴秀長、陣へ斬
 投、秀吉、陣中へ、挟撃入と、其日、限へ、明後日、六月四日、夜たる、危しと、出、我の、我
 を相定、門へ、準備、代、存し、し、り、る、を

秀吉使安國寺惠慶調和屬傳八被捕

張郛公と冠蓋公と相國寺に遊び、ト、肆ふ相を、親せ、むき、を、二、士、共、小、宰、相
 たり、と、こ、ま、城、台、他、年、果、して、斯、の、如、し、和、漢、の、例、髣、髴、する、條、の、り、。宰
 相と、関、白、と、相、國、寺、と、安、國、寺、と、取、違、る、を、よ、り、や、け、り、より、擇、出、せる、その、ふ、や
 有、り、人、。後、も、祈、し、さ、り、り、出、來、れ、り、。當、日、六、月、四、日、の、夜、天、荒、荒、と、使、者、を、り、
 て、小、早、川、の、陣、ふ、在、り、。安、國、寺、惠、慶、と、い、ふ、聖、子、を、招、れ、り、。并、も、遠、惠、慶、ハ
 毛、利、輝、元、歸、依、の、信、ふ、と、。墓、別、廣、濟、此、城、下、を、る、。又、通、場、に、住、職、して、官、錄
 と、を、以、貴、り、り、ける、。然、る、ふ、先、天、法、の、永、祿、の、元、秀、吉、サ、三、い、て、一、ま、り、と、
 ぐ、故、郷、に、歸、ら、ん、と、る、途、中、や、と、だ、の、橋、に、茶、店、に、お、い、く、惠、慶、秀、吉、此、相
 を、親、し、。天、下、に、將、と、る、奇、相、あ、り、と、。禰、々、洞、の、今、果、して、儼、田、柱、石、に、長、居
 れ、り、ぬ、。數、万、の、軍、士、に、傳、令、して、逆、ふ、関、白、の、後、に、進、む、。強、に、遠、人、あ、る、天、日
 下、に、天、業、を、成、成、と、る、。と、私、情、に、懷、在、り、た、れ、を、。万、望、秀、吉、に、對、面、し、て、舊、交

安國寺惠慶

舊情を

攀く

秀吉の

陣

に



の情も倍更たりと。毛利三家の長陣を訪訊せんと披露して。又日己前以度
 信茂出陣なり。遠地より来りある機合あり。秀吉の使者を受たりし。か
 核ものも取敢ひ。秀吉の好むは。防りたり。城隆系まで出陣。然し
 て秀吉の本陣あり。陸の鼻へ来りて着まは。發し昔の雲泥用水。数万軍
 此將たるに自然と禮の恭しきあり。秀吉も對面しつ。遂に古時を禪交
 頗る舊情を深めしむ。騙り秀吉を裏されたる事。近來秀吉軍を獲して元
 春隆系と對陣する陣令。建茂の本意は。其不謂これ城領。不推
 され。主君若大臣位長公輝元と水魚の盟約せし。天下泰平をせしめんと。
 おりたる程も。前將軍義昭公。暗愚に。おはせし。野心を。おぼ
 したせられ。終ふ後。一所。向有く。より。西家。忽地。盟を。破り。將分。を。交。前
 を。獲。し。吳。越。も。等。し。之間。と。變。る。咱。若。大臣。の。代。官。と。して。輝。元。元。春。隆。系。

倅と万死を畏し。兵を鮮せり。是は然く。関東。四國。或は九州。北陸。の將士。倅
 其虚に。案とて。弗威を奮ひ。交戦。更。小。罷。時。し。これ。が。ため。ふ。天下。此。万。民。塗
 炭。の中。に。困。苦。する。事。年。稍。淹。し。く。核。避。得。ば。然。ば。主。君。此。意。と。する。と。お
 ろ。私。の。體。裁。法。張。て。天下。泰。平。の。功。勞。を。妨。る。不。存。者。く。は。此。は。速。く。和。睦。を
 遂。ら。せ。位。長。に。亦。振。く。不。服。の。臭。羽。を。征。伐。せ。し。輝。元。亦。西。海。を。平。治。せ
 ら。れ。ば。忽。地。日。の。本。平。定。た。し。め。つ。田。氏。泰。平。以。議。ふ。事。是。位。長。の。歎。する
 不。乃。臣。に。是。機。縁。と。より。命。令。を。な。し。て。然。ば。和。睦。の。一。義。も。あ。い。く。秀。吉。の
 意。を。も。つ。て。料。理。つ。る。と。お。お。に。あ。ら。ば。遠。意。趣。を。り。て。貴。僧。よ。お。し。く。元。春
 隆。系。に。言。達。し。和。睦。熱。意。ある。に。お。い。く。お。の。伯。耆。本。國。を。境。封。と。し。南。へ。當
 國。兄。弟。川。越。を。て。傾。分。ま。う。と。し。其。不。謂。い。切。ん。と。是。を。い。ふ。伯。州。に。在。南
 條。小。崎。近。年。自。方。に。力。以。築。が。本。領。安。か。し。め。ん。と。お。お。ま。り。ま。り。ま。り。と。兄

郡川城境封とさる。向此所に出陣して高松城を攻めたり。清水長九清
 門が首を看びして和睦せん事任長公に告ぐ。いかになるべき所もあ
 る。是れ故の由て宗治に一切腹いしをせまうまじし。遠くは快と元春隆
 景彼両将へ披露せしむ。然るにと東これる。惠瓊仔細に傾承し。姓が
 鼻を還出で毛利の陣へ立ち入り。元春隆景に對面し。斯如のよしを訣言
 をなく。稟舒らさる。元春隆景も是を聆察の外なる伺われ。呆る
 まで。此稍要時。言をも謂びて又と思惟。誠一かたせしが。元春漸之願
 成。擡は。孫子ヶ謂る言を聆子。約りて和成を。八條ありとを。今他軍
 自軍に所行を鑑るに。羽柴が兵士の最多く。毛利が軍勢殊に妙に増てや
 信長近きうち。出張する。と所か。地軍はまじく。勢深ふ。攻る。は。亦
 猛か。人。自軍。今。在。この。不。加。助。勢。と。さ。る。援。軍。も。あ。く。救。え。ん。と。さ。る。高。松

城へ。眼前。小。落。城。せ。ん。と。日。城。美。つ。待。ま。り。ぬ。後。に。發。の。款。ハ。十。分。の
 勝利。した。と。ち。て。自。軍。ハ。十。分。の。敗。勢。を。い。ご。く。り。世。城。を。い。ご。思。慮。し。る。よ。
 我。と。な。れ。ご。も。勝。敗。損。利。歴。然。と。て。藏。ぬ。べ。し。制。や。智。勇。は。秀。右。よ。い
 て。お。や。何。ぞ。遠。理。を。織。ぐ。う。ん。然。る。は。今。更。所。無。あ。り。と。和。議。を。か。こ。ん
 と。量。斟。こ。と。誠。に。不。審。れ。才。一。あり。努。く。遠。義。ハ。許。宥。が。じ。と。胸。小。隆。景
 ま。う。さ。れ。る。の。元。春。は。美。見。遠。一。唯。意。に。符。合。せ。り。然。る。に。俺。們。軍。馬。を
 費。し。遠。地。ま。で。出。張。を。せ。し。よ。は。是。余。高。松。の。難。危。城。救。ひ。清水。宗。治。を。助
 ぐ。ん。と。め。あり。倘。よ。く。秀。右。堤。防。を。断。り。洪水。城。を。法。流。し。ぬ。宗。治。を。殺。と
 る。し。城。中。の。軍。民。城。悉。く。助。安。る。と。の。あ。る。を。望。に。信。せ。し。と。和。平。を。遂。げ。し。
 宗。治。を。も。て。切。腹。を。せん。の。あ。り。あ。る。を。決。し。て。和。禪。張。ふ。ま。す。唯。深。く。我。を。て
 死。成。階。に。さ。る。の。外。あ。る。べ。し。と。就。ま。し。く。と。會。へ。ら。ま。し。り。惠。瓊。も。これ

藤田傳八

密使

蛙が鼻の

陣外

捕

ら



此方あり。存び城が鼻に刺し。元春隆景が言る。陸如荒守に頼らう。一
 升も今羽柴が勝つて軍攻。忽ちとて止むこと。是に深秘の所謂あり。
 其を精しく鞠めるに方僅を首獲めぬ。俾はるべきと。荒守が軍中此令
 法よりとも厳密やして諸率の者獲急慢なく。時々刻々小番兵攻交
 代。夜源といへども。燦炬を多く焚連絲を五堤の陰林の樹
 此ハ。駛率を轟と列在。有流。旗揮等させ。或ハ。情児。旗數十人。遠隔。那隈
 小散在る。さや。或ハ。二丁。或ハ。五丁。乃至。十丁。が。その。際。に。伏。を。ひ。て。潜。躲
 款の。用。者。潜。来。る。代。に。伏。る。胸。の。折。鼓。の。暗。号。を。鳴。す。通。は。通。達。合。不。不
 名。だ。に。容易。翻。つ。が。う。浩。る。全。備。の。河。を。を。こ。と。元。春。隆。景。方。術。成
 鳩。せ。ど。高。松。四。邊。の。長。堤。を。断。落。ん。だ。を。難。さ。に。か。ん。胸。子。六。月。三。日。夜
 の。子。も。稍。盡。く。丑。子。を。始。く。當。天。あり。り。り。が。破。を。一。揮。の。並。う。ち。破。り

弊禍の根巻揚つ。長き刀。伏。躲。を。相。あ。し。種。が。鼻。の。本。陣。を。左。へ。嚮。ふ。く。
 潜。く。踏。く。と。通。る。者。あり。個。々。に。存。候。速。く。を。着。破。遠。陸。遠。際。より。走。集。り。
 暗。号。に。大。鼓。を。搦。鳴。せ。る。數。百。の。駛。率。八。方。より。轟。く。と。至。雖。て。恠。し。漢。子。を
 推。捕。卷。有。無。を。言。せ。ば。子。孫。足。提。高。も。眩。子。に。相。轉。潜。着。將。大。右。慶。松。が。陣
 一。擊。從。新。と。ま。り。祈。る。子。を。慶。松。く。だ。ん。の。渡。子。を。擊。出。し。を。く。倚。く。これ
 一。擊。たり。なる。秀。右。も。是。旗。驗。む。い。太。刀。推。拏。て。起。出。し。下。狩。し。て。標。下。旗
 探。さ。し。む。る。小。果。し。て。一。封。の。翰。書。送。せ。頸。下。に。密。固。と。結。着。たり。駛。率。們
 一。登。く。控。拏。て。秀。右。の。前。に。呈。出。し。荒。守。あ。ま。は。執。て。送。去。つ。兩。封。推
 願。書。翰。の。面。記。看。く。去。ば。春。門。後。河。を。教。小。早。川。元。清。門。尉。殿。惟。任。日。向
 守。と。記。し。たり。是。刻。地。元。秀。の。密。使。を。る。後。田。傳。八。郎。負。武。り。昨。二。日。初

夜のこゝろ京都妙心寺被發行て行程およそ七十里を晝夜にして馳来
 り。元利の陣へ投入せしに之慮も羽柴が存候に捕つて。今亦密書をも
 奪られたり。秀長遠書の面記を祝ると等しく馳騎之。被討者も割取
 に。驅逐もたまはば破着れを首より胸へけ韓竹の儘く割却せられ味
 ともいへば息絶たり。秀長氣色快然とて馳率を勞らひ汝們よく軍
 令守り。晝夜怠懈あらざる。敵の向者と捕得て。自軍勝利の瑞と
 ありぬ猶遠後も懈怠なく。相守られよと應賞厚く。彼半一個に青枝
 一貫文付。賤りたれを。食ひ給ひ恩を謝し。原の守に立返りぬ。秀長方
 此人代遠に被書付被記。自よ。今日二日京都本能寺及二條の城に伝
 長父子を數手滅し。畿内を敵する者なしといふ。心は獲る。秀長は
 樂に其地の戦中不敗果され。追日遠事。以聆そのありを。羽柴が陣

中忽然として。是れ安所を失ふ。其虚に系く伐らん。いかに秀
 長勇ありとも。滅亡不日あり。河原の一助ともあらんと欲し。頼門床下
 呈書し。畢ぬと。記書する被祝するより。天に哭し。地を悲し。涙も血を
 潮をりふして。止る不便子ありたり。これ不図く一度の悲哀。一度の
 憤怒。且亦一度の歎び。遠書れよと。敵の予小。容ざりし。あを我運の天よ
 く。ちり。天よ。く。こ。是。城。場。あ。ん。奉。し。と。巻。收。め。無。し。て。機。會。よ。く。安。國。も
 此。敵。の。陣。中。に。あ。る。伐。知。く。和。睦。の。事。を。料。理。せ。り。方。僅。秀。長。の。勇。に
 執て。大。愛。これ。不。過。愈。々。也。不。利。の。大。敵。あり。て。高。松。の。城。い。ま。も。臨
 び。後。よ。の。明。智。の。逆。礼。起。り。選。く。も。亦。道。城。失。ひ。進。む。も。敵。て。其。途
 あり。人。敵。備。遠。事。被。滅。その。あり。を。滅。し。進。退。の。途。を。失。ひ。一。勇。の。危
 急。遠。ふ。即。ち。人。尋。常。の。大。將。あり。を。慌。忙。諸。將。を。集。め。さ。ぬ。高。松。を

さぶさの獨心に秘蔵し。色にも顯るを恭然自若と和平の詞を執辨ひ。それのもろび自方の備軍に銳氣折失ざる。實小天下の豪傑こと。只遠一人ありぬるを

清水長左衛門源遠自殺 属 西軍和睦

愉快なる出波性者。幸福あつる伴ふ。是金天の威むるとあり。地は愈むるところにして。豊公とよく導きぬ。若くは後回傳ハ怪歩れ若く用ひて。そのくこれ後毛利へ報人とする。其傳ハ奇形脚も。先秀がため用若あつて。秀右に事を報るの若くして。秀右がための用意あり。斯まむるの符合とあるを。天下万里の廣くとも。會秀右が。幸後たつてといふこと。諸も安國寺の惠瓊法師へ若び秀右の陣に到り。吉川小早川の答語あり。聆る候も若くはにぞ。秀右これを聆らひ。論は理の正道に。

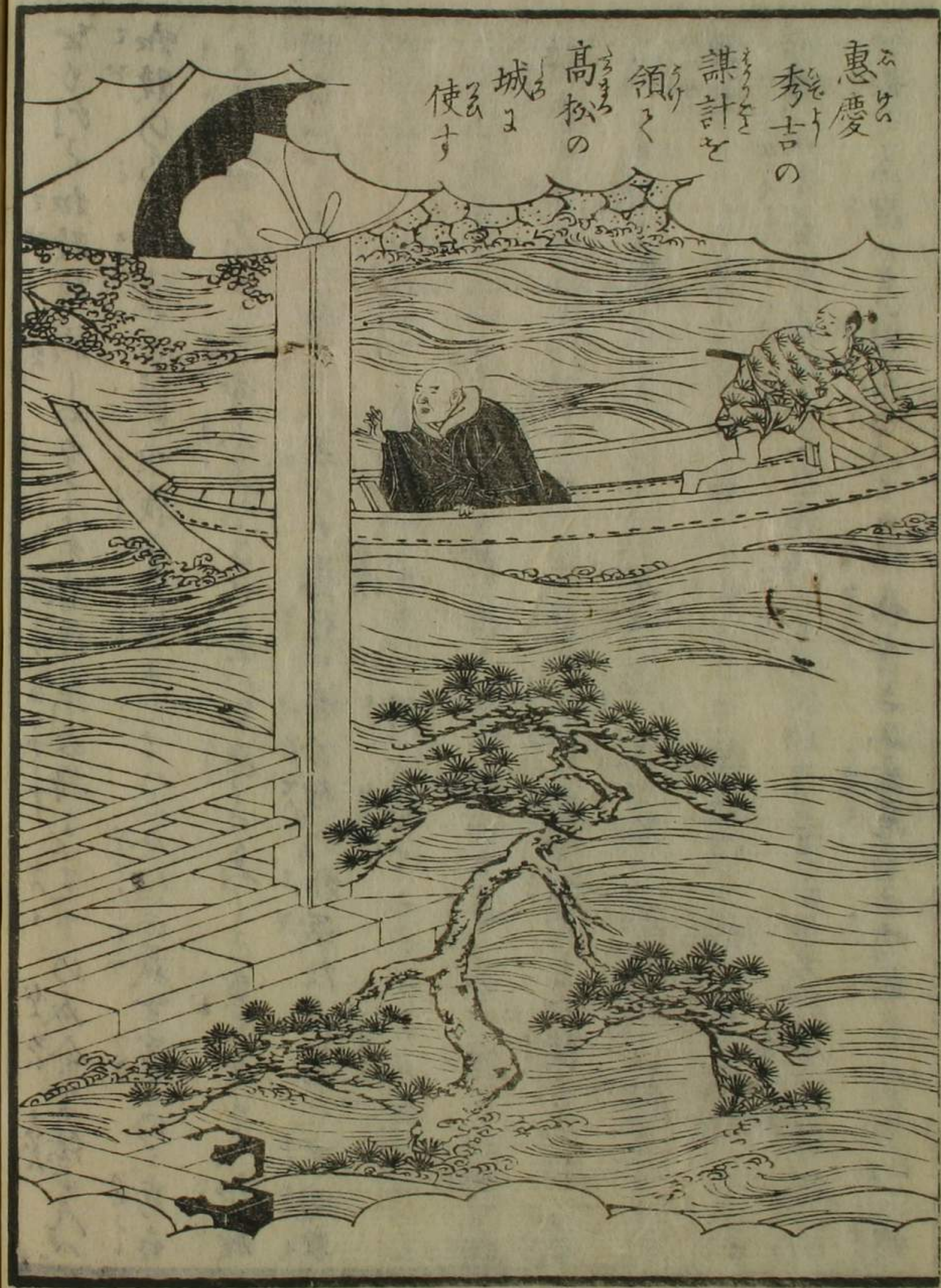
清水せりめく助命せを。和睦兼福快ふ。倘然なくんば和睦せむとを。我將の誠心そつるふ。この愧ふるは。若くは秀右が身におい。攻蒐り。若くは松の城を今更改陥さして。和睦せんこと。果壽弓矢の恥辱か。只弄計ふり如魚のくびと。惠瓊に多く贈餽ひ。然して秀右詞静ふ。汝遠道の調辨。宜しく候らむとのあり。咱將軍家へ祈よして。五分は願。汝得るは。骨を厭も。自計畧。行ふ處さやと問き。若くは惠瓊原。秀右の天下に將たる若くは。最右師の少時より。親戚したる伴ある由。然も辞する氣色なく。何となく。命を背く。いかに。折指揮に。いこそ。身に力得事にして。あつる。粉骨とも厭らむ。か。領業する。小。と秀右も。ま。快然と笑を。會。を。進。稟。され。高松。

の城に清水長左衛門宗治は我忠信中國に變ぶべきものかた武士
あり。汝小舟に扶乘す。彼城中へ榜刺り。今咱新舌一始終の言と元春
隆景が言と我精しく候せし祝言させ。宗治は切腹かすむべし。然る
瞬の両家の和睦忽地こ小漏れて中國一時に平均とす。是亦汝が大
切あり。據つて穉する事なかきと令せしむるも安國寺仔細に所
地は小舟に跳乗して松の城へ赴きたり。此駒城將清水長左衛門を雅
波近松一舟に寨樓に登置して。一軍旅を詳し在るが。遙に惠瓊が来
る候着て各これを大に訝里。今安國寺が遠所に集るは。定めて取調六そ
ありは。快唱奉て所へとく。城門は開き投ぐるが。城中とくを水
流けは。船の候も。奉丸まぐ撐着ぐる駒清水宗治安國寺を
招き。来る意趣いのかふと問。惠瓊謹で東へくるや。遠遭秀信忠信

をものし和睦談判あり。元春隆景と其將より足下の命令は。松平
和睦の事を決しては。唯我らに候も死せんと。全信正義を宣ふの事。秀信
は又足下をものし生命を命するを。誓は恥辱とす。と宣ふより。和睦
期あり。うとを看え。然ども愚信の違合我の和睦たしむる。中國
地平均し。万民都て若楚也。免せん。輝を願ふが。忠信。快成候せし
と。只官両家に往來して。詞を料理といふことも。違一条の難に因て。和
禪全く破れんと。故は来り。足下の針織を借んと。願くは。よと。工
も。何れも。咱も。教尔。身といふ。我宗治。熟く。是を。聆て。感涙。肝。小。銘。出。る。ま。で。
潜然として。もうり。零。霎。時。に。止。敢。さ。り。し。が。稍。あ。り。と。泪。嚙。禁。強。持。り。也。先。利
の。礎。石。元。春。隆。景。の。ご。と。と。後。將。の。又。母。に。あり。と。を。お。お。え。び。今。兩。陣。に。勝負
を。量。る。ふ。秋。の。多。勢。なる。つ。と。く。信。長。を。さ。し。出。馬。を。と。所。然。と。れ。は。ま。は。り。と。博



惠慶
 秀吉の
 謀計を
 領く
 高松の
 城を
 使す



大か多し。それ小似もせは自方ハ微勢。不々助勢兵士もな多毛。毛利家
此存亡唯遠一挙にありその成偶款より和せんといふ。宗治おとれの瘦
武者五人十人棄つとも。款就で和睦の詞を執行せよとせよ。なまに却
く咱を慶憐せよ。和禪は信ひぬる。和意。悉く毛物祈ひし。咱今
露命成りつづらに。暫旬存生す。り在とも。決して助る命に何ん。生長過
て切なり。乃の名成汚さんより。深く。狂枉。運遭の和強とのひを
乃乃分。死期の面目けとす。一。意款。一。宗治。い。ま。宗。運。不。盡。す。と。威
わらぬ命唯ひとり。棄つ。由。多。ふ。中。國。の。危。亡。を。救。ひ。國。家。を。安。ん。ど。諸。氏。の
苦患。成。助。る。律。不。く。く。と。さ。れ。大。者。あり。と。筆。捺。把。て。秀。右。一。遠。と。書。輪。の
文。に。曰。

謹而奉述。愚意當地。長々之御在陣。辛苦疲勞。乍

恐奉察候。然者今既我々所運極。此愈近覺候。小臣
清水長左衛門宗治。代于城中之衆命。可致切腹
之間。怖者被垂憐。慈宥城之數輩。皆悉御助命。被
成賜者。忝可奉存候。依回章之次第。而明五日辰
刻。可及切腹候。其節小舟一艘。並酒肴。聊有恩賜
者。可謝兵士之疲勞候。恐々謹言。

天正十年六月四日

清水長左衛門宗治

蜂須賀小六殿
堀尾茂助殿

斯の如く記書了。安國寺にて是。以。通。與。所。房。遠。書。を。齋。行。く。荒。家。等
小調より。執調。辨。を。ま。さ。り。と。く。單。に。怖。ひ。ま。さ。り。と。り。諸。亦。在。川。小

早川六乃臣生害の伴子かいつくハ決して所可憐河多から以備西將一聞
 達せをわらへば許容かろべしと稟上被聆て安國寺精威渡以咽却り
 誠以忠信我勇の武士と足下此憐をまうまふことを英名普く九五八
 五で輝くわらへと嘆稱ふし然バ登速遠由を荒布守一言達し和乎を成
 統をじむるしとく蛙が鼻へ急歸里宗治の書翰を呈出し伺の始末
 を舒るにぞ秀右わたく感嘆ふし世に未曾有なる我勇士く先遠別
 の微回毛利和順にして天下泰平か多し河房の勤切驗よいつく祥ふ
 秀右を恩賞特大なるべしとまう以ふ恩禮も遠响いむ信長公の
 先秀に裁せられむい一軍代知さるが由急心せうら遠御辨を倣達を
 を所傾悖揚ぶと獨矢くと在たりる荒布守も宗治一返翰する
 其文に

御状之趣荒前守令相達之處以御身一人之生
 害被代牢城之庶人之結構一入被相感即可被
 應御望之旨候依此小船一艘酒肴十荷可進之
 候明日及其刻限者檢使可差遣候間御心靜御
 用意可有之候恐々謹言

天正十年六月四日

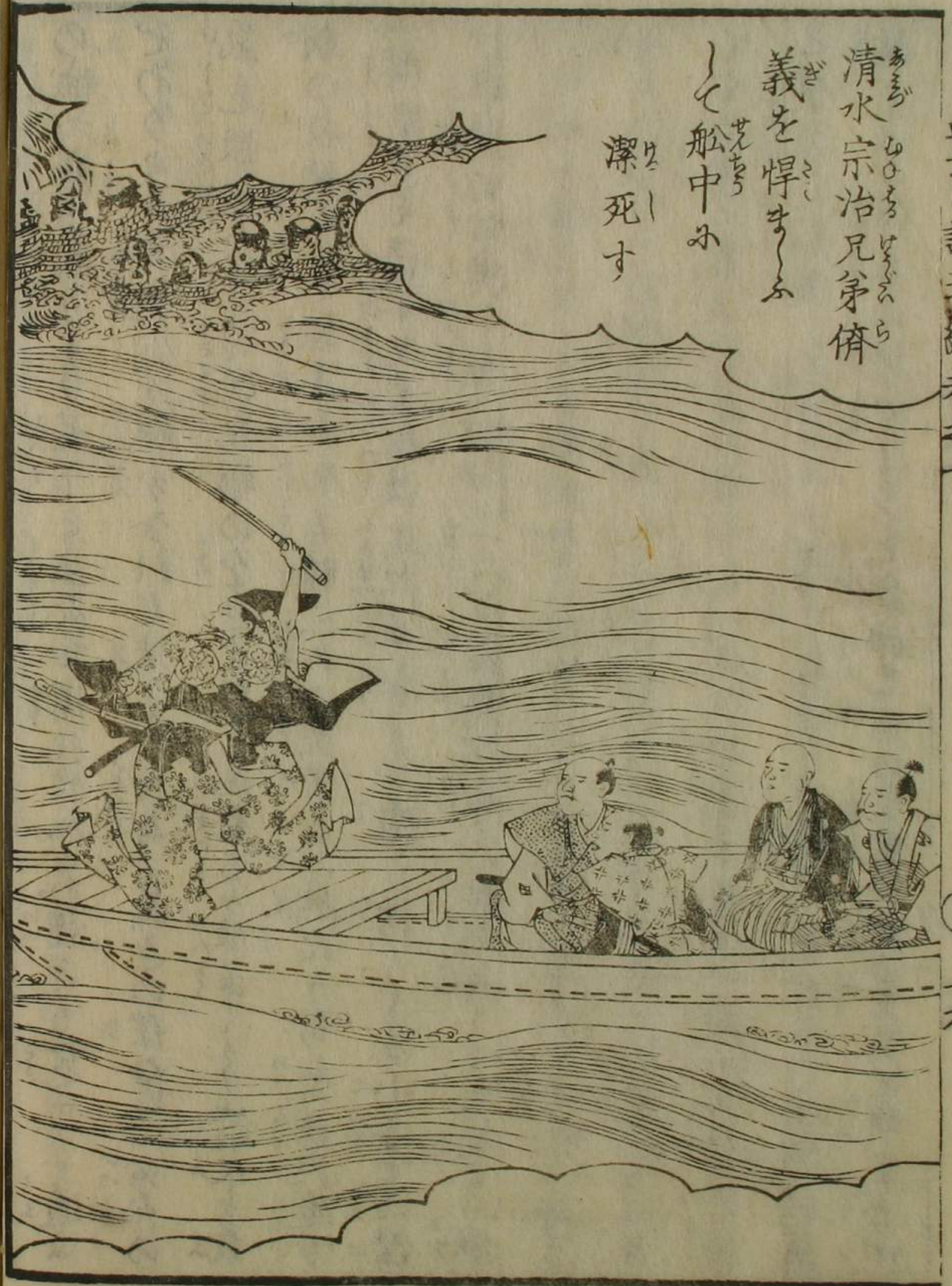
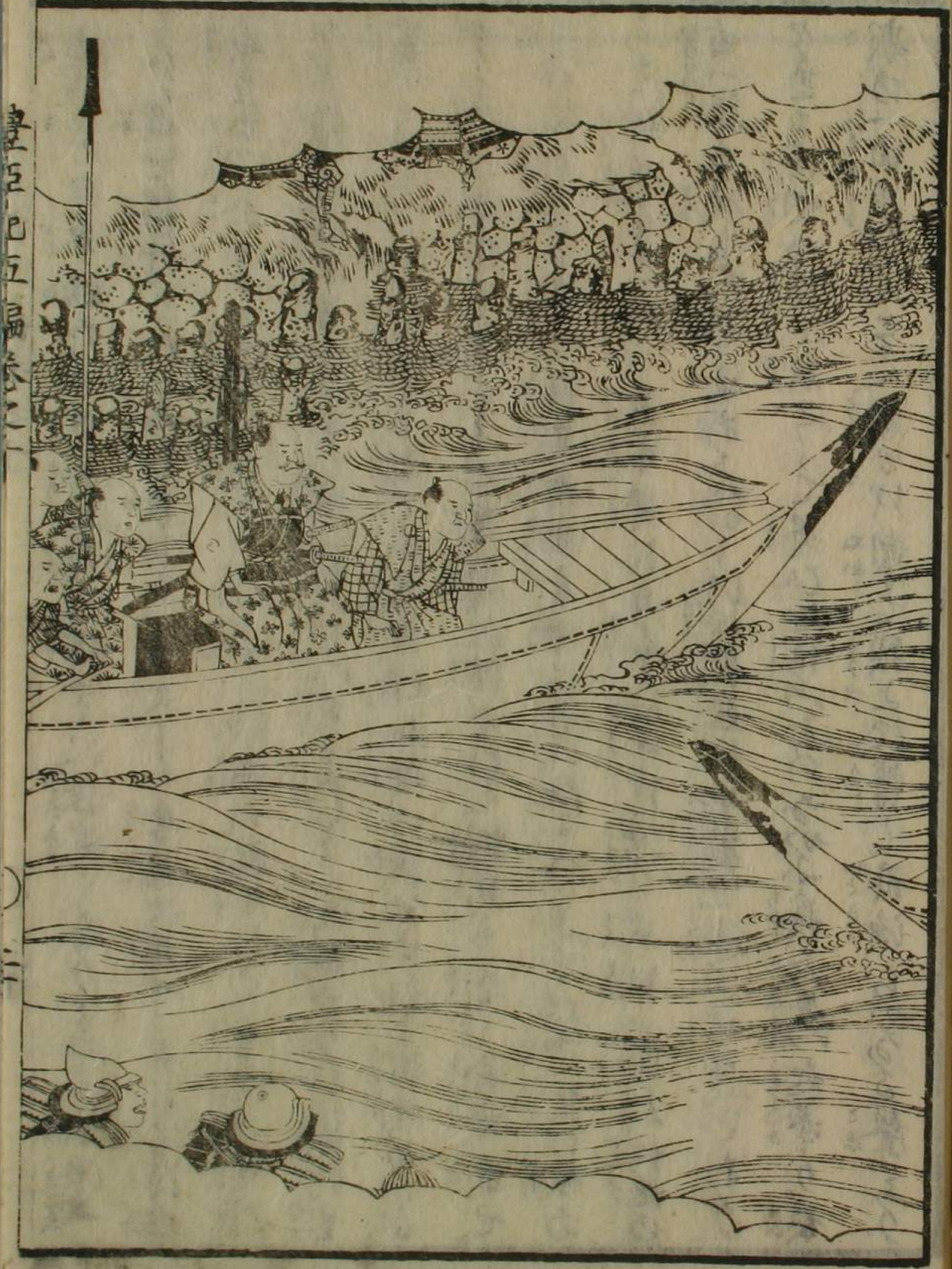
清水長左衛門殿

蜂須賀小六郎
 堀尾 茂 助

遠書を以て安國寺に傳ふをうむき六清水宗治大不執び當役切
 腹の準備等以時ふ長左衛門宗治今宗治月清入道と色を會借小
 殿到らんと最終の器具を代看と頻に色を林委と日昨日羽柴

一集せし乃弟一個自害せを城中の將率悉く助命す入道と名を
 決して生害しあすまると聆之月清うち若ひ吾室ま入道と名
 唯の汝が兄とれを家名相續とすりしを多病に極く其任は當らる
 由入道をし家督孤汝に譲りたり。然まよ何と汝が身に今遠難波
 家りぬ唯の家督を續たすも遠難波とて唯身小當最。今日生害ま
 言そのの唯の身を外に何とあすまると若ひ禁むる何なれといふ制
 听容べ。遠難波近松も。僕も切腹まぐといふを宗治これを推止め
 て是下達まを肝めまると何といふ親あすまると遠地孤道れと帰國
 とも。他の朝あすまると度希の生命を命す。自生害の所行を元春
 隆景両公へよまると傳へたむと。听も敢て傳兵清左衛門斯の意
 入ぬ大將の命にこそ。俺們不届ふいえども亞直隆系に命被せま松

の城一藪の日のより。是下と生死を借らせんと。謂も定まる道ま
 ぞありたる。是俺們が職分なれを決して活命まをさの理にと必死の
 氣色激然たり。時既死期のをまをたれを流るる陣中より清水が最
 期の檢使として。極尾後助右晴之の從者と小艇にうち乗静に遠方
 一躰進まを。清水兄弟。難波近松。秀右より。襦き移りくる。小舟を清澄
 に航巖田切與十郎。宗治の一人は。初割城命。一。船到舟よりち乗る。概
 門を閉ま躰出たり。これや弘誓の彼岸松よ。慈悲の槽。そと生死の海濱。
 出るも助やと哀態あり。猛ま心の軍士ま。悲歎は堪えぬ胸塞がるに悟
 てやあまが妻。子。眷属。ハ。皆。引。起。つ。眼。涙。追。慕。し。遠。世。の。断。別。方。僅。些。刻
 と。鏡。柱。を。引。柄。し。悲。し。叫。び。所。見。ハ。こ。こ。ま。り。過。く。哀。れ。も。外。他。の。袂。残
 濡。し。たる。秀。右。の。陣。中。より。も。宗。治。已。下。の。生。害。を。見。覺。悟。せ。んと。群。里。出。田



清水宗治兄弟併
 義を悍まふ
 船中み
 潔死す

豊臣言五

船の岸に奉陪たり。雙方此舟の樽まに隣近くありなれを。宗治声
 うけ禮を整行これハ毛利家にかいく久々厚恩に添せよきたる。浪水
 長左衛門全くと入道月清すつと染の隆宗の旗下にく。香統の領門
 たる。難波傳兵衛。近松左衛門尉の口人充み代里く切腹をなれ。俺們生
 害しおやうなバ。筑前守殿と右馬頭。元和睦の義をよたし調理ある
 中。単に頼ひまぬと。懇懇に演なれを。堀尾もを舟傍進せ。
 是ハ筑前守が近臣。堀尾後助吉晴ふし。なまふとふすれ。所望の條お
 らを。仰所らまは。筑前守にも各々。心中で深く感佩せられ。約儀の
 旨一應も。使して想遠あるべし。心寂然に生害を。遂させぬとあり
 なまを。四個ハ悠々然として笑ひを信ぶる。なま長左衛門起奉り。最
 期の一曲奏でん。腰刀拔制して頭上に翳し。最津らある聲あり

費「の舟を」とあり。逢瀬の浪枕浮せ。此後成り習うくの。驚るぬ身ぞと
 うなれと。遙く声と一奇に。胆拉到と。十文字の清く。撃と聆り。與
 十郎太刀揚揚ると。着る際も。速くも。首ハ按當と。落し。赤牡丹花
 此英の枝。枝離る。像くあり。月清ハこれを着るより。も。弓手に。種冊
 馬手に。業。さつくと。書一首の。祥世。聲高ら。か小吟。むとく
 惜。あつと。時。何りて。こと。世。中。の花。を。花。な。れ。人。も。人。を。ま
 這一吟の。か。を。あ。ぬ。に。胆。十。文字。に。胆。到。る。が。人。も。人。を。ぬ。れ。句。の。は
 胆。到。刀。拔。收。め。る。后。人。も。人。を。ぬ。れ。と。言。ら。か。小。吟。と。早。れ。バ。與。十。郎。因。り
 首。成。ら。お。と。れ。是。は。後。ひ。て。難。波。近。松。借。り。胆。到。死。し。ら。な。れ。バ。お。も
 次。身。に。初。割。して。各。田。の。姓。名。首。に。記。し。し。検。使。は。近。づ。き。堀。尾。自
 探。あ。して。后。與。十。郎。も。胆。到。咽。を。新。く。死。し。ら。な。れ。バ。救。万。の。軍。さ。これ

伏見初。大坂勇士よ我將と感嘆する声あはくく。聞くとく止
 ざりける。然れども毛利家よ。清水俊昌將が切腹の詞を惠瓊に
 告と听より。毛鷲くわと一無あらず。諸の宗治毛利家の。よめを思て
 生害せしよる。忠切雅う遠士に。起米の亦あるま。と感涙の行儀の
 如く。聖雅てをたうく。時子元春宣ひたるや。躬長左衛門自殺の
 うへの如何とるとも事返らん。渠が遺言を弁ぐるを。和賸を熟禪
 さまに。いふと。此ふおいく亦存び。惠瓊を秀右が陣へ遣らん。革ての
 使節。これ福系越後守を當副う。遠駒羽柴秀右。堀尾が若宗
 治の自殺を精しく听し。殆感ふ堪む。て。今更惜さ我たり。を
 然りといふも毛利家より。和賸の詞の。又言来らざる。詞も
 しまと終らぬ。小毛利の使節。福系。惠瓊。淡野を。の言状たり。

然バ対面を。座しとく。席正粒最嚴重に。使者。目。道。出。対
 面の廳。れ。友。右。に。悪。田。幣。眞。賀。辰。堂。堀。尾。青。木。本。下。仙。石。神。子。田。脇。坂。
 糟谷。列。座。せり。遠侍。ふ。加。藤。福。清。片。桐。平。野。石。川。石。田。凜。然。う。く。連
 座。たり。大。將。出。座。と。呼。声。一。齊。滿。門。の。紙。戸。開。る。儀。祝。ま。は。白。後。紗。衣。袂。小。淡
 藤。泥。の。長。袴。を。な。む。六。膝。へ。操。揚。て。む。ん。む。と。座。せ。を。荒。群。の。諸。士。會。一。同。に
 低。頭。を。相。強。太。凜。と。と。て。惠。瓊。福。系。自。己。を。知。る。儀。涙。む。を。う。り。に。俯。儀。たり。
 筑。前。守。大。春。に。く。毛。利。家。の。使。者。近。ふ。と。言。ふ。これ。因。り。越。後。守。曰。寸。を
 う。り。膝。の。ひ。し。筵。席。三。寸。頭。を。擡。け。和。賸。の。詞。状。言。状。に。秀。右。これ。を。聆。く
 め。され。い。か。み。を。輝。元。隆。系。元。春。を。め。め。和。議。を。謀。せ。て。今。革。て。言。授。る。条。
 秀。右。早。速。主。君。一。祈。和。賸。を。包。く。存。む。る。と。言。ふ。惠。量。ら。ぬ。も。一。昨。二。日。系
 初。日。條。本。能。寺。に。い。く。右。大。臣。信。長。公。の。家。臣。明。智。亮。秀。右。た。め。不。裁。せ

らきやいぬと命をる聲もうちうるまで。落涙枚乃及をせり。これを聆り
 遠席へ伺極みたる諸士群臣。是れをうり采深津を吾と云はれり。遠
 里より秀右衛門をかく拭ひ。曇る日聲は咳整へ。斯の如き遣化かき。遠
 阪を聆れおいく。毛利家定めく和睡此事。思くは約を愛びて。それと
 を達て和せんとおろを。先達く東出たるごとく。伯耆使中出雲の二國を
 色成中より裂通與。人質松書を出さふおいく。秀右和儀を兼法と
 ぐ。倘然もかくを並相務負成決まぐ。是までの信長おとせり。聞
 達此うへの軍なれば。及をさるとおろを。今日より六心の信ふ。吾方
 寸に決謀したる。快く帰りと遠詞を。主人に若く使者治後と。其糸深館
 小投おひぬ。福永渾身小沸汗して。衣成十分に浸し。謝辞を報て。三
 帰望ぬ。時小清野。黒田の個々。清右お出で。後言をさく。俺們もめく

奉听 京都の大變。新量此大事哉。沖心中に藏蓋せり。佛倅小和
 睡の洞とんとをると。却て其使者一詞顯。小言听らる。おがし。張危
 くいららびや。毛利の三將遠我を聆。バ虚機小糸して。攻来く人。所賢
 慮をく人を稱ふま。トと言收まる。を荒茶守。費雷の像く大勢。おひ。方
 僅上方の裏に縁。官易毛利を手に握り。汝條氣悩ると。なれと。
 畏る色なくおとせり。一身都て是。膽おらん。欽
 秀右大慮真令。毛利家服属。單征。歸軍
 雲へ一瞬のうちに百變。波へ一嘘のあひ。ふ。万翻。ま。と。是。を。疾
 と。を。危。急。も。翻。て。子。種。の。安。穩。と。は。
 万の憂苦も。愛して億の歡樂と。さる。此。小。逢。ふ。と。さ。の。神。も。孩。き。鬼。も。畏
 る。然。バ。大。勇。情。智。ひ。る。隆。系。元。春。の。名。將。家。ま。る。全。く。矛。盾。の。懷。を。棄。て

後に和議を調る。誠小不思議の奉止なり。然不福系誠後、寺惠瓊の西人の廂山なる毛利家の本陣に立寄り、筑前守が言及る。詞條を残り相舒るふぞ。輝元隆系元春侮或ハ驚た或ハ歎び之息。是るを過刻あり。漸くふして大將輝元西叔誠願く室を。其後ある誠誠田信長。信家此一あ小善張被り。都の強動絶倫ゆん。其虚を奪ふて事誠謀ふ。いかなる智勇此秀右も。銳氣折けく故亡せんが。義士の兼ぶる謀略にや。取叔の所思いかなをやと。輝元探問し。ひひを。然として座したる隆系。後客として應て曰く。大將の方僅室ふところ。現に際際す。所へあはせと。羽柴秀右。後末誠誠田家に仕て。其勅諭を聞きたるに。所為都て不思議にして。絶倫の將士と言ふ。一。近くハ二本攻。智取攻。眼筋不見る。高松攻。いかなも妙略奇謀にして。

人間技とも思わへ。増くや信長明智が。あはれ誠せられ。誠初に。て。自己軍中。鎮め。清水を生害せ。定て。集が。あはれ人。然して。華ふけ方より。和議の使者を。誠小達人。大事誠明。和議。事。を。破。んと。威を示す。約束。成。勇。か。る。か。る。感。しても。程。餘り。あり。斯言さ。秀右を。畏る。やうに。聞。ゆ。も。天下の大。恙。恐。く。ハ。遠。上。の外。か。る。一。然。ま。ま。遠。遭。秀。右。に。怒。誠。信。ぶ。長。久。の。孫。も。い。は。し。信。僅。小。勝。利。を得るとも。集。若。将。軍。の。柄。を。搦。る。を。生。唯。當。家。を。仇。と。怒。て。吹。毛。の。痰。を。賣。人。と。是。より。大。なる。い。は。し。集。以。ハ。勢。て。教。む。く。使。も。誅。人。ト。ま。う。ま。は。し。只。唯。誓。を。信。を。さ。る。を。肝。要。小。い。な。ま。是。毛。利。家。の。礎。と。て。万。代。不。朽。た。し。む。る。謀。界。小。い。あり。と。言。ふ。誠。熟。く。所。し。也。右。川。元。春。怒。願。ひ。現。小。現。隆。系。此。言。ひ。と。ある。是。毛。利。家。の。礎。言。あり。今。い。何。ぞ。



東山巴五編卷之二

七



東山巴五編卷之二

七

筑前守京都
 本能寺の大變を
 聆て中國より
 一騎不馳る

親謀まらざる。秀吉が望む随意をまそ。和勝は遂多か。と我をりて味め
 道をりて始終を深くも料理果せ。先使福永安國寺に月夜越前を以て後
 せ當副使者の口状を言啣ぬ。且吊靈の奉奠ふ。沈香一箇。金百兩。白
 綾百卷。蠟燭千挺。これを齎せ。桂鼻北本陣へ到らしめ。三箇條の證は
 密て和勝調熟の洞成言收。極喜書成出。て乞ふれば。秀吉は速諾受
 ち。帰軍の符を听せ。使者は返返し。備その。ち。小毛利家
 より。又千の加勢の將として。渡邊友清。元忠を唱出。よく秀吉に助
 力して。立功せよ。と命探され。和勝の證人質。以久。苗。米。藤。原。秀。色
 毛利元就の八男。と出。せ。桂。民。部。廣。重。後。中。加。の。是。を。副。護。加。勢。兵。士。五
 千。餘。人。弓。三。百。張。手。銃。及。百。箇。銃。藥。矢。鐵。まで。おの。く。皆。具。外。に。羽
 柴の憑言ありとそ。毛利家の花号印たる。抱慈姑の旗。之。十。行。秀吉に

方へ編みられたり。あまふ依て。羽柴秀吉。毛利三家の大将。遂に。乞
 と。か。さ。あ。り。さ。る。信。義。を。感。喜。し。実。小。侍。を。起。人。と。あり。と。て。人。質
 に。あ。り。し。秀。色。は。懇。切。な。勞。和。勝。新。ま。て。調。辯。う。へ。嘗。く。は。地。を。取。用
 る。一。時。時。を。速。く。上。洛。し。て。運。兵。の。首。領。碩。並。亡。君。の。吊。合。戦。を。愉
 快。せ。ん。と。欲。し。毛利三家の大将。對面し。て。存。む。れ。と。秀。吉。は。中
 閑。忙。た。れ。を。逆。徒。退。治。を。遂。て。の。ち。緩。く。出。會。戦。期。を。言。ふ。然。に。言
 せ。所。ら。ま。よ。と。く。三。使。を。帰。し。め。て。后。森。勘。八。回。兵。在。戦。和。勝。善。悦
 此。使。者。に。命。し。毛利の陣所へ遣はされ。高松の城中へ。浮。田。九。將。士。一
 万。餘。騎。越。越。さ。せ。川。也。六。月。六。日。己。の上。刻。陣。を。鼻。城。陣。除。き。先。や。門。を
 續。て。後。敵。より。馳。登。る。一。搦。へ。て。運。奉。を。急。か。く。と。宣。ひ。奔。り。突。地
 起。馬。牽。騎。て。う。ち。濟。里。隻。敵。雙。拍。當。多。も。馬。の。名。に。希。不。既。望。驪

曰蹄臥泥之強出以相風之暮が蟠龍の天ふも騰らん猛威に此を
加藤福清片桐精石後野峰須賀振尾中村是田大石神子田中條
本下平野成りてこれ方と地出をぞ陣中烈大に爆る
像く。残まかりたる駭動ありけり

繪本豊后勲功記五編卷之十終

安政七庚申歲孟冬刻成

吉澤氏藏板

和漢
西洋
書籍
賣捌處

大阪心齋橋博勞町角

群玉堂河内屋
岡田茂兵衛

